

はじめに

大阪市は極度の財政難にあり、経常経費の切り詰めはもとより諸ゆる事業の選択と集中によって財政の健全化を図る必要があり、マニフェストに沿った市政改革を緩むことなく進める途上にある。

そうした状況の中での議員海外視察であり、他で指摘されているような物見遊山的なものであってはならないことは重々承知しつつ、敢えて今回の海外視察団に参画した次第である。

今や、高額の公費を費やして視察するまでもなく、インターネットで大概の各国、各都市情報は入手できるとの報道もあったが、その書き手を含め、初めて海外の空気に触れた時の感動というものは書物や電子通信などで得られるものではないことに異論はないはずである。

感じ方や感じるものは人それぞれ違うが、13年前に初めて海外視察に参加したときは、まさにそれまでのちっぽけな人生観が変わるほどの感動があったことを鮮明に覚えている。

以降、観光ガイドのもと有名観光地を巡るだけの私的な旅行には幾度となく行ったが、ツアー等では許されない特別な場所へ足を踏み入れることが出来たり、各分野における行政用語等を理解する専門通訳のもとで質問が出来ることなどは、この機会以外には実現できないことである。

より濃く、より深く異国の人や文化に触れる中で、歴史の重さや平和の尊さを痛感し、街のかたちやそこに暮らす人々の社会観、国家観、地球観などに触れることの意義が筆舌に尽くしがたいものであると考える。それはひいては議会人としての見識を高めるだけでなく、必ずや有形無形に本市の将来へ寄与することに繋がると確信するものである。

また、今回の海外視察は、特に初めて市会本会議での議決を経た視察であることから、意欲旺盛に参加した議員は、議会と会派を代表する立場で赴くことを強く自覚されており、相当の成果が期待できると考えられた。

一方で、6泊10日というそのハードな旅程を考えるといささか気後れもしたが、おそらくこの機会を逃しては自らの世界観の空白が埋まらないままに終わることになると考え直し、参加することとした次第である。

2回予定されている勉強会に先んじて、多少なりとも訪問先の行政や経済等の予備知識を、と巷の書店を訪れたが、欧米諸国に関する資料は数多なれども、ブラジルも

のは見当たらず、それほど日本から訪れる者が少ないということを再認識した。ブラジルは日本にとって、まさに遠くて近い国なのだ。

神戸港から笠戸丸の出航で始まったブラジル移民の100周年にあたりと聞き、かつて日本から移住した方々の苦難の足跡に触れる願ってもない機会だとも考えている。

また、来年は大阪市とサンパウロ市の姉妹都市提携40周年の記念すべき年でもあることから、疎遠に陥りやすいサンパウロ市へ平松市長の親書をしっかり届け、日系議員や移住者の方々と今後の関係がどうあるべきか議論してみたい。

同じ行程を視察する場合、人数の多いほうが通訳・ガイド・移動車等々の共通経費の頭割りが安価になる。今次視察団が議員8名の編成となる中で、ホテルは1室2名利用とせざるを得ないなどの面もあったが、胸を張っての報告とすべく内容の充実した視察を行ってきたいと考える。

2月4日（視察1日目）



成田から正午にニューヨークへ発ち、午前10時半着。在ニューヨーク総領事館の浜田領事の出迎えを受ける。時差と睡眠不足のせいか極めて寒く感じるが、ニューヨークは暖冬だとのこと。

最初の視察先へと向かうが、約束時間には若干早く、途中、自爆テロで崩壊したWTC跡のグラウンドゼロに立ち寄った後、ニューヨークシティホールに入り、市議会事務局次長のラファエル・ペレス氏からシティホールが担う機能・役割の説明を聴取し、公聴会開催中の委員会室等市議会内施設を見学。



13時からは、ニューヨーク市のメリンダ・カツ市議会議員の事務所にて約1時間、主に議員の活動内容や処遇等について両市の状況を意見交換した。



15時40分から（財）自治体国際化協会ニューヨーク事務所を訪問し、佐々木所長と中園所長補佐（堺市派遣）より、B I D（ビッド）＝官民のパートナーシップによるまちづくりの説明を聴取。

B I D制度は、一定地域内の不動産所有者から税と同じ手法で負担金を徴収し、その資金を地域活性化にあてるもので、清掃、ごみ収集、警備員配置、警官保持、イベント開催など通常の行政サービス以上のことを行っている。それに従事する人々には雇用機会を与え、市民には安全で清潔なショッピング環境をもたらすことに繋がるが、何よりも不動産価値のアップと集客力向上が顕著となっていることから、そこで生活したい人のためだけでなく、そこで稼ぎたい人のための制度とも言える。NY市には現在約50のB I Dがあり、我々もNY滞在中、タイムズスクエア地区中心に各種のB I Dを目にすることができた。

2月5日（視察2日目）

NFLでニューヨークジャイアンツが優勝し、そのパレードがあるとのことで道路が寸断され、市役所も対応不能状態のためニューヨーク市の保健精神衛生局訪問は午後となったが、この日は全行程にわたって、前日訪問した（財）自治体国際化協会の大東所長補佐と小濱次長にご同行いただいたが、経費削減のうえからもありがたいことであった。

衛生局では、チャイルドケアのアシスタントコミッショナー（保育部副部長）であるフランク・クレシウロ氏とデイケア・マネージャー（集団保育課長）のルビー・リチャードソン氏から子育て支援策について説明聴取した。主に6歳以下の栄養状態と心身の発達を担当している。市内には1万カ所の施設があり、30万人のキャパがあり

ながらも、地域によって過不足があるとのことだった。チャイルドケアとデイケアは同意であり、チャイルドケアセンターは、1人につき30平方フィートが必要であって、最高1カ所200人まで収容する施設である。市の法律で設置し、5つの区のすべてをフォローしている。また、6～12人のプログラムは州法で規定され、州からの委託を受けてファミリーベース（アパートの中で子どもの面倒をみる方法）の事業が行われている。



チャイルドケアセンターは商業施設等を利用し、市が斡旋するものではなく、申請のあったものを審査している。保護者の負担で運営するバウチャーシステムもあり、350件が州と市から補助を受けている。他にNPOが運営し、費用は市が負担しているものもある。数字・音感・体操等を教え、食事も提供する（スナックを出すところや弁当持参もある）。

肥満児が多いことから、市の法律を栄養に関する点で改正し、1日1時間の運動や飲み物の合成甘味料を禁止し、2歳以下にはTVを見せず、2歳以上であっても教育番組のみ2時間限定としたとのこと。

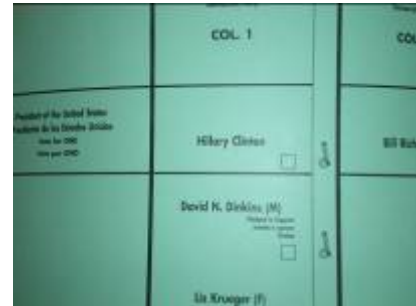


質疑応答では、保護者に入所先の選択は可能だが私立デイケアは費用がかかる、各家庭の経済状況まで把握はしていない、施設によって人種の偏りがあること、などがわかった。

クリントン大統領時代のウェルファ（生活保護）toワーク（働かなければ受給できない）施策によって働きに行く者が増えたが、仕事に行くには子供の面倒をみれないので、親や親族に預けるケースが多い。

市では共働きは当たり前であることから34の企業が社内託児所を設置（NPO委託）しているが、無認可施設も多数あって年2,000件のトラブルや苦情があり、子どもの発達と安全にリスクの認められるチャイルドケアセンターは市の権限で廃止させることができる。DVに関しては、州による24時間体制のホットラインがあり、またそれに特化した調査機関もあるとのことだった。

折しも米国大統領予備選挙におけるメガ・チューズデイにあたり、極めて困難かと思われたその投票所の視察が、米国国務省広報局担当官のグレゴリー・ケリー氏によって可能となり、第 158 パブリックスクールでの予備選挙の風景と実際を詳細に視察することができた。



続いて、ニューヨーク外国特派員センターを（財）自治体国際化協会の佐々木所長の同行で訪問し、グレゴリー・ケイ氏の案内で視察。大統領予備選挙の開票速報等のブリーフィングにはタイミングが合わなかったが、日本のTVで映し出される施設内を目の当たりにすることができた。

余談だが、平松大阪市長が毎日放送のニューヨーク支局長で赴任した時のオフィスも近いとのことだった。

さらに、これも相手先の受け入れは困難かと思われた保育施設が、子どもたちの退所後であれば視察してもよいことになり、ロックフェラーセンター街のビルの地下にある保育施設「ブライト・ホライズン」を訪問。ジェニーン・マンゲル所長の案内で内部を視察。少人数ごとに仕切られた部屋が続き、各部屋には子ども一人ひとりの食事・体調・睡眠等のメモがあり、工夫した保育が展開されている様子がうかがいしれた。

「こんばんは！」の声に振り向くと、若い日本人女性で、聞けば当施設の教員であるとのことだった。

ニューヨーク中心のオフィス街で共働きする親が預けることから、保育料は月額2,400ドルと高い。また、高い分だけ充実した内容ということだろう。

夜遅くようやくホテルへ帰着し、風邪気味のまま就寝。

2月6日（視察3日目）

午前6時起床。ペンシルバニア駅よりアムトラックでワシントン市へ移動ということで慌ただしく準備。ワシントンD.C.（District of Columbia：コロンビア特別区）は連邦の首都としてどの州にも属さず、州でも市町村でもない特異な統治機構をもっている。

市長と議会の関係は、議員が公聴会で市民の声を聞き、議会の議決を得た法案が市長に送られる。市長はそれを拒否できるが、議会は3分の2の多数決でこれを翻すことができる。議会側に大きな力が与えられていることになる。

ワシントンD.C.議会のクワミ・ブラウン議員を訪問するも、彼はキャピタル・バジェット・ヒアリング（公聴会）に出席しているとのことで、それを傍聴に入った。

大型公共投資（交通・住居・橋梁・野球場等）に年95億ドルの予算を組んでいるが、今後500億ドルを投じたプロジェクトも検討中ということらしい。この日は市民団体代表との間で、橋梁の架け替えの議論がなされていたが、終わりに大阪市から議員視察団が来たことが紹介された。



ワシントン D.C. 議会は市内8地区より1名ずつの議員（下院）と比例の5人（上院）が選

ばれ、13人で構成されている。ブラウン議員は37歳で、経済発展委員会委員長を務め、教育改革や雇用・在宅、地域活性化などに力を注いでいる。ブラウン議員との意見交換では、議員報酬や政策スタッフの体制などが多く語られたが、シカゴ市でもそうであったように、議員の政策立案能力を高めるため報酬以外の部分に多くが配分されている。



また、窓外に展開する落ち着いた景観にも話題が及び、州法によって市内の2マイル（5キロ）圏内はキャピタル（モニュメント）以上の高さの建築物が認められないと説明され、大阪駅北ヤードの開発をからめた議論がなされた。



ブラウン議員から、これを機にワシントンD.C.と大阪市の間の情報交換の橋渡しを願いたい旨の発言を受け、木下団長から「ぜひ大阪市を訪問してください」との要請を行った。

ブラウン議員の秘書イルマ・エスパルザさんの案内で議会内施設の見学を行った後、

在米日本大使館の表敬訪問へと移動した。



大使館では、實生参事官から米大統領選挙の制度について説明を受けた。概要は、4年に一度行われ3選禁止（最長2期8年）で、形式的には間接選挙で選挙人が大統領と副大統領をペアで選出。ただし、一般有権者は候補者に投票するため、事実上の直接選挙である。18歳以上の米国市民で有権者登録を行ったものが選挙権をもち、出生により米国市民であり35歳以上の者が被選挙権を有する。1月から6月に各州で予備選挙もしくは党员集会が行われ、全国党大会で大統領候補者を選ぶ権限のある代議員の獲得数が決定する。昨日（スーパーチューズデイ）のニューヨーク市での投票風景がよみがえってくる。この時点では民主党のヒラリー上院議員とオバマ上院議員が大接戦であり、共和党はマケイン上院議員が抜け出し、ジュリアーニ前ニューヨーク市長が断念かという状況だった。

林参事官からはサブプライム問題について説明を聴取した後、加藤良三特命全権大使のあいさつを伺った。大使は、「日本国はあくまで世界のリーダーとなり得る国であり、主要先進国もそうした評価認識をいささかも崩してはいない。」と語られ、幾つかの事例をあげてわかりやすくお話をいただいたがその雰囲気や語り口はまさに全権大使に相応しく紳士然としたものだった。



大使館を後にし、石川公使主催の夕食会への順路途中で窓外の各国大使館や領事館街を視察し、国会議事堂前とホワイトハウス近隣に立ち寄る時間があったが、さすがに米国首都として、また権威の象徴としての威厳と風格を感じずにいられなかった。

石川公使、五嶋公使に室田・上野書記官と夕食をともにしながら楽しく懇談をさせていただいたが、どなたもざっくばらんで官僚然しないところが強く印象に残った。

2月7日（視察4日目）

ニューヨーク経由の午後の便でブラジルのサンパウロ市へ向かう予定であるので、午前中を利用してジョン・F・ケネディメモリアルセンター訪問する。

折りしも「ジャパン！カルチャー＋ハイパーカルチャー展」を開催中で、建築家安藤忠雄氏がプロデュースした空間のモニュメントや語りかけると返事をする着物姿の極めて精巧なロボット等を視察した。



19時30分にニューヨークを発って、サンパウロ着は翌朝の8時15分である。視察団としての勉強会もしてきたが、さらなる予備知識を得るため、サンパウロ市及びクリチバ市に関する資料を機中で紐解く。

いざ、未踏の伯国サンパウロへ。

2月8日（視察5日目）

日本からは地球の裏側に位置するブラジル連邦共和国は、まさに手付かずのダイナミックな自然の宝庫であることは言うまでもない。時間と目的外行動が許されるならば、アマゾン河流域やイグアスの滝やパンナタール高原等々を訪れてみたいものだが、それは儂い夢として封じ込め、グァルーリョス国際空港へ降り立った。

海拔 800mの緩やかな高原に開けた都市だけに、真夏とほいうものの、異国南米の風を爽やかに感じた。

サンパウロ市における視察の全行程に大阪姉妹都市委員会の花田ルイス氏にご同行いただく。また、在ブラジル日本国大使館の酒井了書記官も大半の行動を共にしていただいた。感謝にたえない。



最初の目的地であるサンパウロ市議会への訪問前に、同市の日系議員に主催していただいた昼食会場へと向かうバス車中においては、大阪からの移住者で組織された「なにわ会」の山本ゴースケ氏（移民1世）、坂倉ヒロシ氏（移民1世）から、移民の動機や船旅のことやブラジルでの半生、そして祖国日本への熱い思いをお聞きすることができた。

昼食会には、カミア（神谷）ウシタロウ議員（移民2世）、ノムラ（野村）アウレリオ議員（移民2世）、アントニオ・ゴラール議員（移民2世と結婚）が出席され昼食をともにしながら懇談したが、いずれもの議員もわれわれの訪伯を非常に喜んでくださった。

懇談では、本年6月に記念式典が行われる移住100周年と来年の姉妹都市提携40周年事業について、大阪市にも強く働きかけるよう要請を受けた。カミア議員の流暢な日本語で、サンパウロ市の人口が1,200万人ほどといわれるが、実は、国内各地からの流入で2,000万人に膨らんでいることや、55人の市議会議員のうち、日系議員はゴラール氏を含めて4名であり、女性議員は6名であること、後日の移民記念館視察でも再認識することになる明治時代後期に始まったブラジル移民の最初は、開拓というより奴隷解放で手薄になったコーヒー農園労働者に代わる者としてだったこと、当初の移民はマラリアが原因で早く死亡したし、食物は雇い主から高く買わねばならず、生活は赤字で、早い者は15日で親類のところへ夜逃げすることもあったこと、日本への想いが強く、移住者のほとんどの人々が帰化せず永住ビザであることも話された。



このほか、ノムラ議員のお父上は姉妹都市提携に深く関与された方だそうで、30周年事業は盛大に行ったことから来年の40周年を楽しみにしているとの話や、10月5日には市長と議員の同日選挙が行われることも紹介された。



サンパウロ市（聖市）議会訪問は前述の日系議員の案内により、議場や委員会室・議長室等の議会施設とプレスルームを見学。州旗には「我導き、我導かれ」の言葉が。

タピライ市からスズキ（鈴木）議員も顔を出されていた。

サンパウロ市公共事業局清掃部のウェーバー清掃部長はじめ5人の幹部と面談し、サンパウロ市の廃棄物行政及び環境教育について説明を聴取した。

まず、清掃部（LINPURB＝分別収集や環境教育などを担当）からは、固形廃棄物管理のプロジェクトに JICA を通じた大阪市からの専門家派遣によって、アクションプラン実施に向けた技術的アドバイスが得られたことと、廃棄物に対する教育・啓発の3Rの取り組みと計画作りの指導を受けたことに対するお礼が述べられた。



サンパウロ市は大阪市のように焼却処分ではなく埋め立て方式で処分されており、一般の家庭・法人ごみの一日収集量は9,000 t（不法投棄3,000トン、建設廃材400トン、医療廃棄物100トン含む）である。産業廃棄物は事業者負担（自己責任）で処理させ、埋め立て用地もプラス2という特別な場所（地下水汚染防止対策を施した場所）である。一般ごみには、市側によるエコポイント制度（600 m²～1,000 m²単位の地域ごとの道路わきに集積場（エコポイント）を設けており、日本でいう粗大ごみも扱っている。

環境教育の方法と成果については、まだ局部的なもので市全体のものとはなっていないらしく、カミア議員が力を注いでおり、ぜひ条例化したいとのことだった。市としても1回200名の教員に対して情報セミナーを開くなど努力している。

ストリートピープル（土地なし住民の意）のごみ問題に対しては、住宅問題としてのとらまえ方が主だが、州の条例で予算の1%を充てるよう取り組んでいることなどが話された。また、日本からの移住者が農協などの組合をつくったのが始まりでいろいろな組織ができているが、ホームレスの組合もあり、ごみを集め分別し売却したお金が月に1,000ドルになるところもあるとのことだった。

このほかにも、プロジェクト推進のための内部組織強化の考えや5年間のプロジェクト終了後も姉妹都市提携を考慮した大阪市の協力や指導の必要性などが話された。

その後、サンパウロ市役所へ移動。ジルベルト・カサビ市長を表敬訪問し、平松邦夫大阪市長の親書を手渡した。



サンパウロ・大阪姉妹都市委員会主催の歓迎夕食会では、丸橋次郎在サンパウロ日本総領事館主席領事をはじめ、姉妹都市委員会の高木ラウル氏（ニッケイ新聞社主）、ブラジル日本移民100周年記念協会の松尾委員長、ブラジル日本商工会議所の田中会頭、ブラジル日本都道府県人会連合会の山田副会長、北海道協会の木下会長、鹿児島県人会の園田会長、なにわ会の山本会長、和歌山県人会の木原会長や在サンパウロの日系企業者の皆さんと楽しく賑やかな交流で過ごした。



テーブルでご一緒させていただいた松尾100周年記念協会会長から、アマゾン流域の原生林不法伐採に対抗する意味で全伯植樹キャンペーン・21世紀の森づくりへのお話があった。

この活動はごみ処理とも連動しており、市のごみ埋め立て処分地がいっぱいになった跡地を管理する方法として活用するものであり、明9日にはその一つである日伯友好の森（21世紀の森）を案内いただき、記念植樹をさせていただく予定となっている。

また、北海道の木下会長から「10日に北海道から贈られた高さ3mの雪だるまを囲んでお祭りをするから、ぜひ来てほしい。」との要請も受けた。

交流と懇談が進みお開きかと思いきや、なんと「今からサンボドロモ（ブラジル日本移民100周年記念式典会場）へ行くからこれを着て」と100周年記念協会から黄色いTシャツを渡された。聞けば、同会場でサンパウロ市のサンバ・フェスティバルが行われるのだという。その入場券代わりがTシャツということらしく、「せっかくブラジルまで来たのだから本場のサンバを見て帰れ」とのあたたかい思いやりに感謝しながら甘えることとした。

「サンバ・カーニバル」、それは想像したものとはまったく異なるものだった。勿論、リズム楽器が奏でる強烈な大音量や観衆の熱気と数々の大デコレーション・フロートには感嘆の声をあげずにはいられなかったが、TVで見るようなダンサーとの距離ではなく、例えば徳島の阿波踊りを観覧席から見るようなもので、スタンドから30m向こうを整然とした隊列（規則がある）が踊りながら行進するのを見物するのである。今回は、日伯100周年ということで日本にちなんだ衣装やフロートが数多く見られ、サンパウロ市日系人の日本への想いの強さを改めて認識させられたところである。



そうした中、日本の週刊誌「週刊文春」でこの写真が掲載され、「日本の伝統文化を馬鹿にする化粧装束だ」と批判する活字があったが、これこそ物事の経過や背景を知ろうともせず、外国から配信された一枚の写真だけをとらまえて間違っただけ的印象を読者に植え付けるという、最近のマスコミにありがちなお粗末ではある。パレードは延々と続き、日伯100周年委員会のチーム（4,000人の出場者のうち、半分の2,000人）が出てきたのは、日付が変わって午前2時半であった。



それは大観衆の大歓声とともに始まったが、見知らぬ異国へ移住し、血と汗と涙で築き上げた日本人・日系人社会へのブラジル国民全体の強い信頼が感じられた大エールだった。深い感動に酔いながら、眠気も忘れて見入ってしまった。気がつけば午前4時前だったのだろうか。誰ともなく帰ろうということになったが、明日（実は今日）は午前8時発でピラシカバ市のバイオエタノール試験場視察等の行動が控えている。

2月9日（視察6日目）

寝た気がしないままバスに乗りピラシカバ市へ向かう途中、昨夜のカーニバルのフロートが残骸のように広場に並べられていた。聞けば、はかなくも真夏の一夜の夢舞台としての役目は終わったとのこと。

2時間余りでピラシカバ市の広大なさとうきび畑に着



いた。気温 26 度。現地で待ち合わせたネルソン・セラ氏から説明を受ける。



さとうきびは 3～12 月の間、刈り取りと植え付けを繰り返す、同じ株から 6～7 回採取できるそうである。1～2 月は雨季であり、農道の泥濘みや糖分が少ないことから採取はしないとのことで、期待したエタノールと砂糖の精製工場は稼働を停止していた。

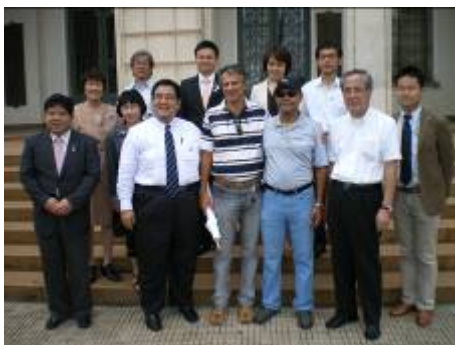
続いて、州立サンパウロ大学を訪問し、農学部教授ブルート氏らから、バイオエタノールの生産や大学の概要について熱心な説明を聴取した。

年間 1,200mm の降雨量があり、さとうきびの生育に適当な環境であることから、エタノール工場は月に 1 カ所ずつ増



えており、15%が外国資本によるものである。07 年のカナ

(さとうきび) 生産は 4 億 5,000 万トンで前年比 15%も増加した。現在は、5～6 社が全ブラジル生産の約 50%を占めているが、15 時間で糖分がアルコール化し、それを蒸留する。繊維分 (バガス) は乾燥させて蒸留用燃料に使用する。他のエネルギーを必要としないため、安価にあげられる。07 年には、180 億リットルを生産し、うち 30 億リットルを輸出、あとは国内消費分となった。自動車は 150 万台生産中 85%がガソリン・アルコール両用車となっている。700 万ヘクタールから採れる 1 億 3,000 万トンの農作物のうち、6,000 万トンが大豆、5,000 万トンがと



うもろこし、米は 1,200 万トン、豆類が 300 万トン、麦は 100 万トンとの紹介があったが、いずれにしても食物に困ることがない国であることに間違いはない。肉類、野菜、果物などびっくりするくらい安い。

放牧牛は 1 億 8,000 万頭であり 2 億ヘクタールの土地が必要なのだが、2,300 万ヘクタールはカナ栽培に適していることから、変更する農家が続出しているらしい。

州立サンパウロ大学は 104 年の歴史があり、ここの農学部だけでも 800 ヘクタールのキャンパスと 3 研究所 (3,500 ヘクタール) からなっている。国内の博士号取得者の 60%がサンパウロ大学卒であり、毎年の入学者には日系人が多数で優秀さを示しているとのこと。

かなりの長時間の説明聴取となり、急ぎサンパウロ市へ帰着し、サンパウロ州立チエテ・エコロジー公園を訪問した。100周年記念協会の松尾会長と高木ラウル氏の案内で、ブラジル移民100周年記念事業として展開中の「21世紀の森づくり」全伯植樹キャンペーン「日伯・友情の森」(大阪市にも協賛の要請を受けた)プロジェクトの一環として、公園内の一角に視察団全員が記念植樹させていただいた。



2月10日(視察7日目)

全行程を在伯大阪なにわ会の下平尾会長と山本副会長、そして酒井大使館書記官が同行されるとのことで、朝からホテルロビーに来ていただいた。今日は気温が32℃まで上がるらしく、久しぶりに夏らしい日差しを浴びることに期待したい。

広大なイビラプエラ公園は日曜日ということで、家族連れでにぎわっていた。その奥まった一角にブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑が建立されており、碑文を読み、玉砂利を踏み、一同敬虔な想いで献花を行う。隣り合わせるように日本館があり、木造の厳かな建築物でありながら、どこか心の休まる感じがする。聞くと、京都の桂離宮をそっくり再現したものであり、日本で作ったものを改めて組み立てたという。多くはない展示品であったが、一つ一つに異国に暮らす移民者が遠い祖国日本を偲び心を癒す重さを感じずにいれなかった。記帳をすませ、慰霊碑と日本館を後にした。



いよいよ待ちに待った「大阪なにわ会」の皆さんとの交流昼食会である。

バスを降り案内された建物のドアを開けると、思いもかけず盛大な拍手で迎えられた。そこには約 100 名のなにわ会の方々がにこやかに我々を待っていてくださったのだ。あらためて下平尾会長から歓迎の挨拶を受け、木下視察団長から御礼が述べられたが、お集まりの皆さんの祖国を想う心と祖国日本への期待に応えるすばらしい言葉に「さすが日本の政治家ですね」の声が聞かれた。



バーベキュースタイルの昼食会には視察団が分散して座り、できるだけ皆さんとの会話をしようということにし、豪華ではないが次々に出てくる心のこもった手作り料理に感謝しながら頂戴した。

私の周りには、山本副会長と娘さんと 7～80 歳代の男性が座られ、世間話に花を咲かせた。サンパウロにおける日系人社会の発展に向けては、もっと日本国と大阪市の支援が必要だとの声も受けたが、もっとも強く感じたのは「なつかしい日本語」で語り合う喜びに満ち溢れていたことである。また、



異国で支えあって生きる連帯の輪が強くあることも印象的だった。ブラジル国へ帰化しないでいることの心中を察して余りあるところだ。和気あいあいのひと時が過ぎ、記念の集合写真を写して会館を後にした。

続いて約束していたブラジル北海道協会の雪だるま祭りに足を運んだ。北海道のある郵便局長から雪を贈られるとのことで、鎮座する大雪だるまを触りたい人々でにぎわっていた。



ブラジル日本移民史料館では、明治末期から始まったブラジル移住者の苦難の道程を表した年表や写真類をはじめ、苦しめられた野生動物や食料にした野性植物のジオラマ、そして見るからにその苦難が推測される手作りの住居や生活用具等々、まさに

「百聞は一見にしかず」のことわざそのままの世界を、息を呑んで見回った。したたかにたくましく生き抜かれた移住者の先人たちへ、同じ日本人として心からの敬意を表したい。

退館後、酒井書記官がブラジリア市の大使館へ戻るとのことで、再会を約束して別れた。

帰路の途中、姉妹都市提携を記念して命名された「大阪橋（正式には大阪市橋という）」を視察した。

2月11日（視察8日目）

午前7時半にホテルを出て、コンゴニャス国内空港からパラナ州のクリチバ市へ飛ぶ。



日本への帰路に要する2日間を残し、いよいよ視察の最終日を迎えたが、考えてみると、朝といわず夜といわず心身ともに安らぐ時はほとんどないほどハードなスケジュールだった。

パラナ州は兵庫県と姉妹都市提携しており、サンパウロ州に次ぐ日系社会（15万人）がある。

クリチバ市近郊には、日系人が4万5千人は居住しているといわれている。パラナ州は兵庫県と、クリチバ市は加古川、西宮、姫路、淡路の各市と姉妹都市提携を行っている。

せっかくの来伯なのに1日だけの視察とはもったいないという、元クリチバ市環境局長の中村ひとし氏の同行をいただき、クリチバ市長の官房長官ルイ・キヨシ・ハラ氏と現環境局長ジョゼ・アントニオ・アンドレゲット氏らと名物シュラスコ料理を共にしながら懇



談。1992年に環境サミットが開催され、「環境都市クリチバ」の名前が世界に轟いたことは有名。人口180万人、自動車100万台だが、独自の交通システムによって渋滞はまったくといってよいほどない。

昼食後、在クリチバ日本総領事館を表敬訪問し、佐藤総領事からクリチバ市とパラナ州の概況について、この日のために作成していただいた資料「パラナ州概観」にそった説明を受け、懇談した。途中、出張先から島之内大使が歓迎の電話があり、木下団長がお礼を述べた。



次いで、クリチバ市役所を訪問。都市交通公社総裁パウロ・シミッチ氏らから、バスシステム等の都市交通施策について説明を聴取。人が主体で車は従の考えに基づき、



家の前がバスストップで、市内均一料金、すなわち社会福祉的料金で貧しい人が長距離でも安く乗れ（1ドル）、バス専用レーンを優先的に走り、早い。利用形態やバスの機能によって車体の色分けがされ、判別しやすくされている。今後の用途地区と道路の総合計画も立てられ、順調に進捗している。なかでも特筆すべき

は、バスターミナルがチューブ型ステーションになっていることだろう。通勤ラッシュ時の輸送能力を増加させるために、電車と同様にバスの床と同じ高さのプラットフォームを作り、乗り降りの時間を短縮させた。非常に興味深い話が続いたが、次の行動の都合で終え、不在で面会できなかった市長、議長への記念品を中村氏に託して、市役所を後にした。



移動の車中、中村氏の説明でチューブ型バスターミナル、バス専用レーン、トライナリーシステムなどを車窓から視察しながら、ヴィラ・ベルジ第1地区環境寺子屋へと向かう。

クリチバ市には「緑の交換」というシステムがあり、低所得者家族の多い地域でごみの分別収集の意識を高めるための方法として、再生可能なごみと食料を交換することを行っている。この日はすでに終わっていたが、価値のある取り組みである。



環境寺子屋教育は、不法侵入地区住民の子どもたちに、学校が建設されるまでの間、学校でもない、保育園でもない、子どもの集まれる場所を提供し、ストリートチルドレンになるのを防ぐ施策として開設されている。



中村ひとし氏は大阪府立大学出身で、クリチバ市の環境局長6年、州の環境局長6年を務められ、多大の業績を残されてきた。同市では日本人が局長であることに異論が起これ、急遽ブラジル国籍にしたとの裏話も。一時、局長の9人が日系人ということもあり、市長は平然と「優秀な人材を登用したら、偶然日系人が多かっただけだ」と言ったという。ちなみに夫人は日本へもらいに帰ったそうである。

中村先生との別れを惜しみつつ、19時25分クリチバを発った。

残された行動はただ帰るのみとなったが、サンパウロ市にもクリチバ市にもせめてあと1日ずつ滞在できたなら、さらなる視察の成果があげられたものと悔やまれるところである。

最後に、今回の視察では、かつてないほど極めて多くの方々との出会いをつくっていただいたが、これも豊かな経験と知識に加え、幅広い人脈を駆使した木下団長の機知に富んだ企画があつての賜物と心から感謝する次第である。また、道中いろいろとお気遣いいただいた団の先生方や事務局の山下氏、小山氏にも厚くお礼を申し上げたいと思う。

アディオス！すばらしい政治家たち、たくましい活動家たち、素敵な日系人たち。